

組織で取り組む潤いのある学級・学校づくり

－子どもの意識と行動の構造に適合した効果のある指導の組織的展開－

研修機関 鳴門教育大学大学院 学校教育研究科 高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース 久我研究室
土佐市立北原小学校 教諭 竹村 和美

1 はじめに

(1) 教育の今日的課題

文部科学省（2008）は、学校教育の目的として、一人一人の国民の人格形成と国家・社会の形成者の育成の2点を明示している。このことは、今日変化する社会の中で、子どもを取り巻く環境が大きく変わってきても普遍的なものである。しかし、子どもの学力低下、いじめや学級崩壊、学習にも職業にも無気力な子どもが増えていること、規範意識や体力にも低下傾向が見られることなど、現在の子どもをめぐる種々の課題は山積されている。また、教師の指導の質的課題、個業化傾向など、学校の組織上の課題もあり、学校教育における本来の機能が十分に果たせていないのが現状である。

これまで、学校における教育課題は、個別に対応策を講じてきた傾向がある。生徒指導に追われ対症療法的な指導により教師の多忙感もますます高くなってきたのではないだろうか。それよりも諸問題を引き起こしている根源的な要因に目を向ける必要があるのではないか。久我（2014）は、子どもの学びや学校生活の中で生起する諸問題（行動レベル）について、その行動を引き起こしている内面的な原因を根拠（エビデンス）に基づいて省察し（内面レベル）、その根源的な原因に適合した打開策を生成し、対応することが重要だと述べている。そして子どもの意識と行動の構造を解明し、その構造に適合した効果のある指導を組織的に展開する教育改善プログラムを構築している。そのプログラムの導入を通して、「教師の指導の質的な変容と、生徒の意識と行動の変容が相乗的に作用し合い、良循環を生み出した可能性がある」と示している。

学校における様々な教育課題について、対症療法的に解決するのではなく、行動を引き起こしている内面的な原因をエビデンスに基づいて省察し、その根源的な原因に適合した効果のある取組を組織で展開していくことが、課題解決になると考える。

(2) 学校の現状と課題

① 学校の概要

置籍校は、児童数63名、8クラス（特別支援学級2）、教職員数14名の小規模小学校である。

② アセスメントにより可視化された課題

表1 可視化された課題

子ども、教職員、保護者対象に平成26年

11月に実施した学校アンケートの結果から置籍校における課題を抽出した。それらは、「子どもが抱える教育課題」「教職員の教育活動に関する課題」「教職員の組織上の課題」と3つに大別された（表1）。

1) 子どもが抱える教育課題

自分への信頼が低く、相手のことを考えて行動することができないという他者意識の不足が確認された。

また、家庭環境が厳しい児童が一定層いて、生活態度や学力、学習意欲に格差があることもとらえられた。

1) 子どもが抱える教育課題	・自分への信頼が低い ・自主性が低い ・他者意識の不足 ・生活態度、学力、学習意欲の格差
2) 教職員の教育活動に関する課題	・子どもに考えさせ、自己決定させる場の不足 ・教師主導型への傾斜 ・子どものアイデアを生かした場の不足
3) 教職員の組織上の課題	・協働性の不足 ・個業化傾向

2) 教職員の教育活動に関する課題

教師の指導の質的課題として、統制型の指導により、子どもに考えさせ、自己決定させる場の不足が確認された。また、教師主導型への傾斜により子どものアイデアを生かした場の不足もとらえられた。

3) 教職員の組織上の課題

組織面では、指導方法の工夫や改善は、主にそれぞれの教師が個別に判断して実施したり、全ての教師が関わらずに学校の重点目標や課題の作成が行われていたり、協働性の不足や個業化傾向が抽出された。

2 研究目的

本実践研究では、アセスメントで明らかになった学校課題を個別に解決していくのではなく、1つのこととしてとらえ直し、子どもの教育課題である「自分への信頼」「自主性」「他者意識」を育むために教職員が、「子どもの自主性を育て、子どもとの関係を築く寄り添い型の指導」を組織的に展開する。

そのことにより、子どもの変容と教師の指導の質的改善と教職員の組織化を同時に具現化することを本実践研究の目的とした。本実践研究の目的を達成するために、「①置籍校の教育課題の可視化、②組織化と教育改善を実現する教育改善プログラムの構築、③構築したプログラムの展開による組織化と教育改善に向けた実践、④プログラムの効果性の検証」の4点を課題として設定した。

3 研究内容

(1) 実践研究の枠組み

① 課題解決に向けた具体的な方策

久我(2014)は、子どもの意識と行動の構造を解明し、その構造に適合した効果のある取組を開発している。本実践研究は、この知見に基づき、置籍校の課題解決に向けた具体的な方策を設定した(図1)。

学びの中でがんばりと生活の中でのやさしさを発揮する子どもを育てるために、取組の構成を

- ・多面的な勇気づけシステム
- ・規範の徹底
- ・主体的な学びづくり
- ・子どものアイデアとエネルギーを活用した活動づくり

とした。

多面的な勇気づけシステムでは、自分への信頼

が低く、学びをあきらめたり、生活では粗暴な乱れが出たりする子どもの実態から、教師によるボイスシャワーを全教育活動で行う。また、子どもと子ども、子どもと教職員による、「ありがとう」「それでいいんだよ」という感謝と受容の気持ちを伝え合う「いいよの日」を毎月14日前後に行う。また、自分や友達よさやがんばりを認め合うことができるツールとして「キラリ通信」を発行し、個々への価値づけ、勇気づけを行う。さらに、校長室入り口壁面を「SMILEロード」として、日々の「やさしさ」と「がんばり」を可視化し、お互いに認め合う場、勇気づけの場とする。

規範の徹底では、教師も子どもも人を大切にして「聞く」ことを、一点突破で取り組む。そして、子どもたちのニーズから生まれた6年生による規範づくり宣言を基に、人を大切にした生活をおくり、安心で安全な学校づくりの実現を図る。

主体的な学びづくりでは、学びへのあきらめや授業放棄、教師への反発といった、これまでの子ども

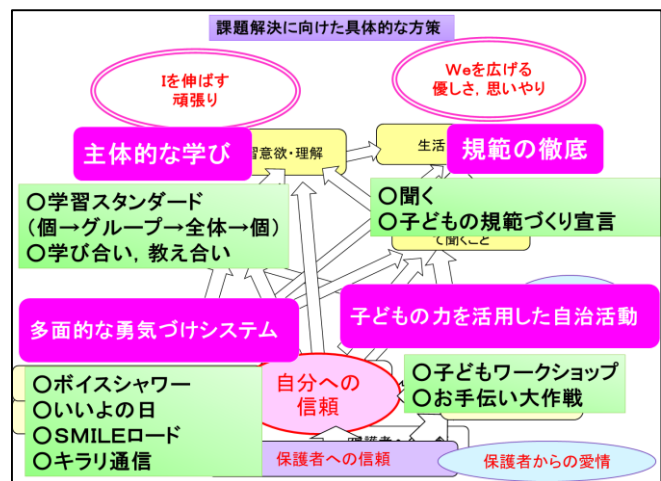


図1 課題解決に向けた具体的な方策

の実態から、わかった喜びを生み出す授業づくりを組織で展開することとする。指導がぶれないように「授業スタンダード」を共有し、教え合い、学び合いのある授業づくりを行う。そして、個の学びからグループへ、そして全体へとといったステップを踏んだ学びを意図的に設定し、教師主導の教え込み型から子どもが主体的に学ぶ授業へと授業改善を行う。

子どものアイデアとエネルギーを活用した活動づくりでは、友だちに厳しく排他的な行動が見られる子どもの実態から、6年生によるワークショップを通して誰もが幸せな学校づくりを目標に、子どもの気づきやアイデアを生かした自治活動を展開する。子どもの力を使ってお手伝い大作戦を繰り広げ、子ども同士の信頼を高める取組を設定した。

② 取組の組織的展開のための枠組み

本実践研究を進めるにあたり、組織的省察に基づく「教師の主体的統合モデル」久我（2011）を基に、置籍校の実態に応じた形で置籍校における教職員の協働による教育改善プログラムを構築した（図2）。

(2) 実践研究の実施

① Research 期

置籍校の教育課題を焦点化するために、学校アセスメントアンケートの結果を報告し、全教職員によるワークショップ型の組織的省察を行った（図3）。ワークショップでは、子どもが抱える課題に対してこれまでの取組で効果があったものと次年度新しく取り組みたいものについて各自がまとめて意見交換を行った（図4）。これにより子どもの実態に基づいた教育課題の焦点化が促された（表2）。



図3



図4

② Plan 期

学校課題解決に向けた具体的な取組を実施するにあたり、各プロジェクト（学びづくり、生活づくり、活動づくり）の組織体制を確認し、それぞれの部会で、教育課題に適合した取組を絞り込んだ。また、6年生の子どもと「幸せな学校づくり」を目指したワークショップを行い、出されたアイデアを4月からの取組に導入した。そして、各プロジェクトの展開イメージを共有し、重点ステージを設定することで、今何を大事にして組織で取り組むのか、1年間の取組や活動が単発で終わらず、ストーリー性をもって展開されるようにした（図5）。

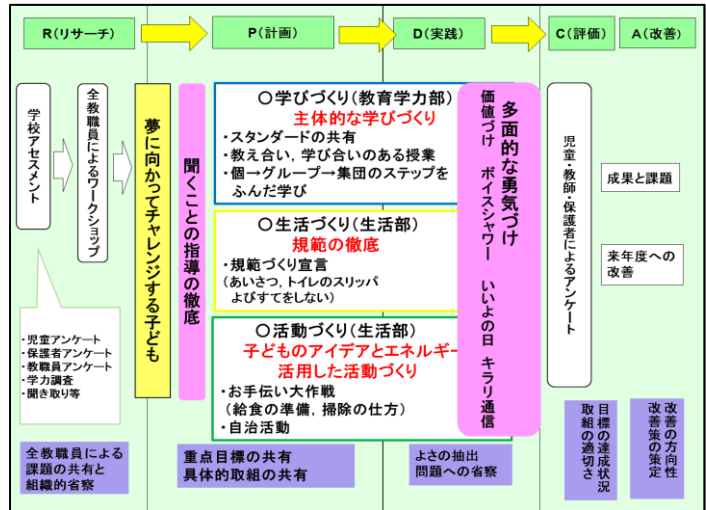


図2 実践研究の基本的枠組み ※久我（2011）を参考

表2 焦点化された教育課題

子ども	<ul style="list-style-type: none"> ▲受動的な学び ▲家庭環境の格差による生活、学習態度が不安定 ▲他者意識の不足
教師	<ul style="list-style-type: none"> ▲子どもに考えさせ、自己決定し活動させる場の不足 ▲個業化傾向



図5 組織的展開のイメージ

③ Do 期

1) 多面的な勇気づけシステム

自分への信頼を高めるために、全教育活動において、ボイスシャワー、「いいよの日」、良情報の掲示等、多面的な勇気づけを行い、学校全体に承認・賞賛の文化の醸成を図った。

・ 組織的なやさしさとがんばりを価値づける「いいよの日」

内面をたがやす取組として、日頃の教師からのボイスシャワーはもちろんのこと、毎月14日前後の1週間を「いいよの日」と設定し、子どもと子ども、子どもと教職員、教職員と教職員がお互いに感謝と受容を伝える「ありがとう」「それでいいんだよ」というメッセージ送った(図6)。この取組は、身近な他者からの価値づけ、勇気づけとなり、自信ややる気につながっていった。



図6 いいよの日

・ やさしさとがんばりを可視化する全校掲示「SMILEロード」

各月の重点ステージに合わせて、子どもたちや教職員のやさしさとがんばりを可視化するために、校長室入り口壁面を「SMILEロード」と名づけて良情報で飾り、お互いに認め合う場、勇気づけの場とした(図7)。SMILEロードの掲示を見て、学年を越えて子どもたち同士が声をかけたり、教師が子どもに積極的にボイスシャワーをしたりすることで、他者を認め潤いのある関係づくりが図られた。



図7 SMILEロード

・ 笑顔が広がる「キラリ通信」

子どもたちや教職員が他者を意識してやさしい気持ちで行動した様子や、あいさつや宿題の提出など、当たり前

できていることを価値づけて、「キラリ通信」として各家庭に配付をした(図8)。帰りの会で学級担任が「キラリ通信」の内容を読み上げると、紹介された子どもはもちろんのこと、周りの子どもたちからも拍手がおこり、学級で賞賛し合う姿が見られ、笑顔が広がった(図9)。



図8 キラリ通信



図9 紹介された子ども

2) 規範の徹底

・ 人を大切にして「聞く」

規範の徹底として、教師も子どもも「聞く」ことを一点突破で取り組んだ。生活でも学びでも人を大切に聞くことができるように聞き方のマニュアルを学年の実態に応じて作成し全校で取り組んだ。

・ 6年生による規範づくり宣言

6年生が人のことを大切に、けじめのある生活を送り、「日本一笑顔いっぱいの学校にしよう」と宣言をした(図10)。そのためにみんなががんばりたいことをお願いとして全校の前で発表をした。3月のワークショップで出し合った意見の中から、「あいさつ」「トレイの使い方」「よびすてをしない」を先生達も一緒にがんばってほしいとプレゼンテーションをして伝え、これらを生活の重点目標として全校で取り組んだ。



図10 規範づくり宣言

・ 保健委員会によるスリッパ注意報

6年生が、「今年こそ気持ちのよいトイレにしよう」と宣言をしたことを受けて、保健委員会がどれだけスリッパがそろっているのかを分数で表す「スリッパ注意報」の取組を行った（図 11）。叱られるからそろえていたスリッパも、工夫ある掲示物によって整頓の状況が可視化されるため、分数を学習していない下級生も「同じ数になるように全部そろえよう」と楽しみながらそろえていた。

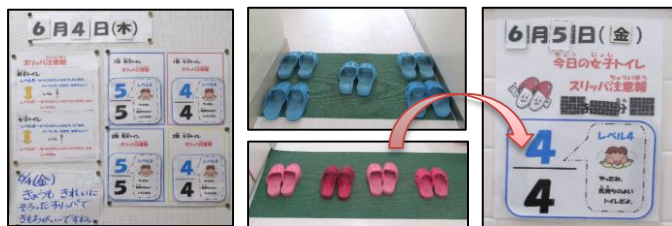


図 11 スリッパ注意報の取組

3) 主体的な学びづくり

教師主導の教え込み型から子どもが主体的に学ぶ授業へと「授業スタンダード」を共有し（図 12）、教え合い、学び合いのある授業づくりを行った（図 13）。個の学びからグループへそして全体へとホワイトボードやノートを使い、教え合いや学び合いの場を意図的に設定した。

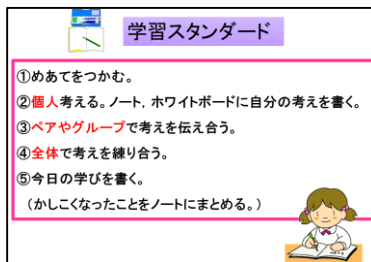


図 12 学習スタンダード



図 13 教え合い、学び合いの様子

4) 子どものアイデアとエネルギーを活用した活動づくり

・ 子どもワークショップ（図 14）

これまで、子どもたちの思いやアイデアを生かす場がなく、教師主導で学校活動が展開されていた。それにより、子どもたちにはやらされ感があり、かつては強い反発もあった。このワークショップで、自分たちの学校は自分たちで



図 14 子どもワークショップ

つくっていくという思いを持つことができたのとらえることができた。そして、子どもの力を使った活力のある学校づくりを駆動させる第一歩となった。

・ 6年生のアイデアを生かしたお手伝い大作戦

6年生が1年生のサポートをする「お手伝い大作戦」は（図 15）、6年生のやさしさを引き出し、自主と思いやりの姿が見られ、子どもも教師も笑顔になった。



図 15 お手伝い大作戦

・ 委員会活動を活性化し、子どもの力で学校づくり

これまでは、過去の取組を年間計画として教師主導で取り組んできた委員会活動であったが、子どもの気づきやアイデアを生かし、子どもたちの力を活用した学校づくりがいろいろな場面で見られた。体育委員会では、運動場の環境整備や道具の点検など、自分たちが考えてできることに取り組んだ（図 16）。



図 16 体育委員会の活動

5) 組織化の促進、支援

組織化を促す支援では、各プロジェクトの取組や子どもの良情報を、「SMILE通信」として（添付資料）定期的に教職員に情報発信して、組織的共有を図った。

(3) 実践研究の総括

① 子どもの変容

本実践研究を通して、自分への信頼、教師への信頼、他者意識、クラス自治などが高まり、主体的に学ぶ意欲も向上した（図 17）。

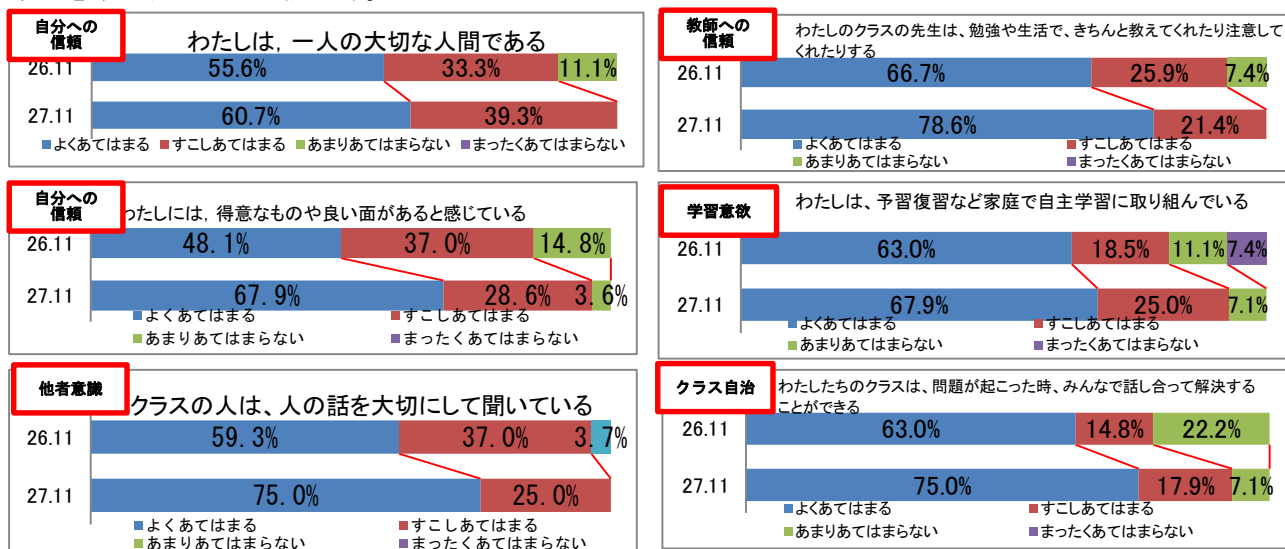


図 17 子どもアンケート結果

② 教師の変容

教師主導の教え込み型の指導から子ども主体の授業へと転換しつつあることが読み取れた。また、子どもとの信頼関係の高まりもとらえられ、教職員の協働性の高まりもとらえられた（図 18）。

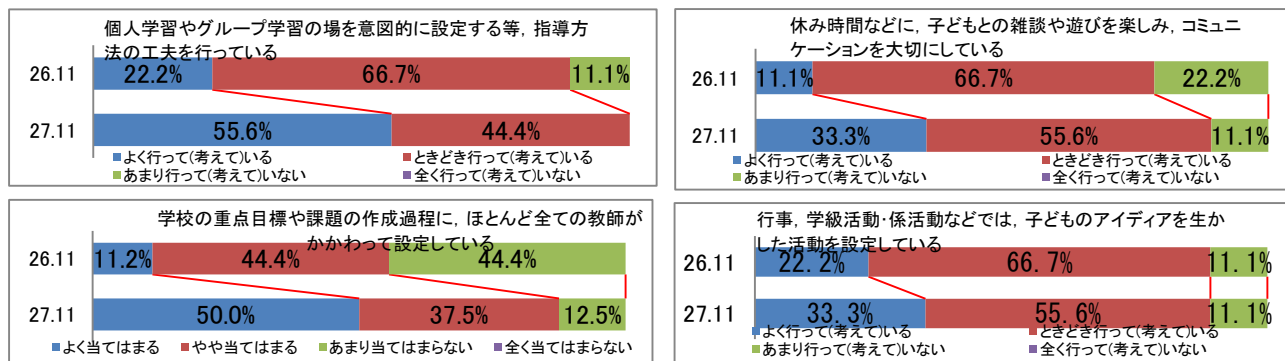


図 18 教師アンケート結果

4 まとめ

(1) 実践研究の成果

本実践研究の成果として6点を挙げる（表 3）。

第一に、被受容感が高まり自分の存在を肯定的にとらえることができるようになったことである。この変容の要因として、内面への働きかけである「ボイスシャワー」「いいよの日」「良情報の掲示」など、全教育活動において、組織で価値づけ、勇気づけを継続的に行ってきたからだと推察する。また、行動面での取組として、縦割り班活動や委員会活動の中で、学年を越えた支え合いや助け合いの活動の場を設定したことにより、子どもが自主性や思いやりを発揮し、お互いに認め合う機会があったことも促進要因として考えられる。

第二に、自分への信頼とともに、教師と子どもの信頼関係、子ども相互の関係性の改善といった他者意識の醸成が確認されたことである。「ボイスシャワー」「いいよカード」などによる価値づけ、勇気づ

表 3 実践研究の成果

- ①自分への信頼の高まり
- ②他者意識の醸成
- ③学習意欲の向上
- ④クラス自治の向上
- ⑤教師による授業改善
- ⑥協働性の高まり

けにより被受容感が高まり、自分に対する信頼及び、学びや生活におけるがんばりや、やさしさへの内発的動機を高めたことに加え、子ども相互の信頼関係の向上につながったと推察される。そして、子ども相互の良情報の掲示（SMILEロード、この木なんの木など）、お互いに認め合う場が更なる促進要因となったと考えられる。

第三に、学習意欲が高まり、家庭学習の習慣が図られたことである。この変容の要因として授業改善が挙げられる。教師主導の教え込み型から、教え合い学び合いのある授業へと転換し、どの教科でも関わりのある授業が日常的に行われるようになってきたことや、45分の授業の中で、子どもが「わかった」「やったあ」という実感できるように教師が教材、教具の工夫をし、授業の質的改善を図ったことが要因として考えられる。

第四に、クラス自治の向上に伴う他者意識の醸成と規範意識の内面化に一定の向上が確認された点である。「人のことを大切にして生活すること」を生活や学習のあらゆる場面において価値づけ、子ども同士が励まし合い高め合う中で、他者意識や自己有用感が高まったと推察する。また、子どもに考えさせて実行させる自治的活動を数多く展開し、子ども自らが学校をよりよいものにしていくといった規範意識の内面化が促進されたととらえられる。

第五に、教職員の指導の質的転換を挙げる。これまで、教師主導の教え込み型、統制的な指導に傾斜をしていたが、子どもに考えさせて実行させるという第2の視座へと教師自らが意識を変え、前述したように授業改善を図ることができたことである。

第六に、課題解決に向けて協働性が高まったことである。

これらのことから、子どもが抱える教育課題解決に向けて、子どもの意識と行動の構造に適合した効果のある指導を組織的に展開したことで、子どもの変容と教師の指導の質的改善と教職員の組織化を同時に具現化するという実践研究の目的は、一定程度達成されたととらえられる。

(2) 今後の課題と展望

本実践研究では、家庭環境の格差や友だちとの関係、教師の指導の在り方によって、「学びへのあきらめ」や「生活規範の乱れやすさ」という子どもの実態を基軸に、効果のある指導を組織的に展開してきた。この取組は現在も実践過程である。実践のさらなる継続を通して、他校への汎用可能なモデルとして精緻化していくことが、今後の課題であり展開の可能性であると考えられる。

そして、一人の教師として、久我の「優れた教師がもつ3つの視座」を目指し、子どもの力を使った潤いのある学級づくり・学校づくりを実現させたい。大学院で学んだ理論や実践力を今後の教育実践に生かし、子どもたちの幸せのために、さらなる研鑽を積んでいきたいと考えている。

〈参考文献、引用文献〉

- 岩井 俊憲 (2011) 『勇気づけの心理学 増補・改訂版』 金子書房
- 大西 雅人 (2005) 「確かな学力」と「豊かな心」をはぐくむ新しい学校教育の創造
子どもの自尊感情をはぐくむ学校についての一考察 高知県教育センター
- 久我 直人 (2009) 「組織的教育意思形成を通じた組織化による教育改善プログラムの開発的研究(1)
—組織的省察に基づく「教師の主体的統合モデル」の構築—」学校教育研究紀要 第24巻
- 久我 直人 (2014) 「中学生の意識と行動の構造に適合した教育改善プログラムの開発的研究
—生徒指導困難校の教育再生のシナリオの理論と実践—」教育実践学論集第15号
- 久我 直人 (2015) 『教育再生のシナリオの理論と実践 確かな学力を育み、いじめ・不登校等を低減する「効果のある指導」の組織的展開とその効果』 現代図書
- 善野 八千子・前田 洋一 (2013) 『力と夢を育てる新しい学校づくり』教育出版
- 古荘 純一 (2009) 『日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか』 光文社新書
- 文部科学省 (2008) 「中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会 審議経過報告教育課程をめぐる現状と課題」